

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K10942

研究課題名（和文）統合失調症当事者の自己開示・自己発見・リカバリー：ナラティブの質的量的分析

研究課題名（英文）A qualitative and quantitative analysis of narrative by people with schizophrenia: Their uncovering, discovery and recovery

研究代表者

小平 朋江（KODAIRA, Tomoe）

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：50259298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：統合失調症当事者（経験専門家）の視点から、語りを公開することによる回復過程として「UDR-Peerサイクル」を提案してきた。語りを公開（Uncovering）し、対処法を発見（Discovery）することと回復（Recovery）は関連が深く、仲間（Peer）と出会い、支え合いながらリカバリーのプロセスを楽しむことを図式化（モデル化）したものである。当事者が聞き手や読み手の存在を意識していることが明らかとなり、「観客（Audience）を位置づけたUDR-Peerサイクル」として発展させた。多様なリカバリーの姿を可視化して人々と共有することでピアサポート活動の重要性の根拠になる可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統合失調症当事者（経験専門家）の視点から、これまでの研究成果を発展し、「観客（Audience）を位置づけたUDR-Peerサイクル」として図式化（モデル化）したことで、多様なリカバリーの姿を可視化して人々と共有できる可能性を検討できた。ピアサポート活動（当事者が他者のリカバリーに貢献する）の充実のために当事者活動の重要性の根拠を示すことにもなり、当事者の生き方に着目した多様なリカバリーの姿を、さらに明らかにしていくことができる。精神看護学教育にとっては、当事者視点でのリカバリーの考え方に根差す豊かなナラティブ教材の教育的活用を可能にする。

研究成果の概要（英文）：From the point of view that people with schizophrenia are experiential professionals, we propose a recovery process model named “UDR-Peer Cycle,” which describes the positive circular process of uncovering of experience, discovery of coping strategies and recovery from agony of their experiences together with peers. We further develop this model by adding the important role of audience as listeners or readers. This model can also explain and visualize the importance of the peer support activities with varieties of recovery process.

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症 リカバリー 当事者研究 ピアサポート テキストマイニング

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

入院中心の医療から地域で当事者が生活する方向性へ支援が変化し、新たなリカバリー概念を導く必要性がある。統合失調症当事者で心理学博士の Deegan は「リカバリーは過程であり生き方」と述べ、Ridgway は手記の分析を行い survivor mission に言及した。野中(2011)は新たなリカバリー概念にとっての当事者の手記活動の重要性に言及しリカバリーのヒントが満載と述べた。

当事者視点でナラティブを公開(アンカバリー)している人の回復(リカバリー)には、どんな特徴があり、仲間(ピア)の意味とはどのようなものであろうか。浦河べてるの家の「当事者研究」は、自己病名をつけ「自分の助け方について研究」して発見(ディスカバリー)し、素顔で病名と実名、病気の対処法を公開する。表紙モデルが当事者の NPO 法人コンボの雑誌『こころの元気+』は、写真と記事でリカバリーの姿を伝える。研究者らは、浦河べてるの家や『こころの元気+』などの出版物の分析に取り組み、「べてるまつり」では当事者が語りを公開する場に居合わせ、病いの経験を語ることで人の役に立ちたい(同じ病いをもつ他者のリカバリーに貢献したい)思いを聴き続けてきた。Riessman(1965)はヘルパー・セラピー原則を提唱し、Gartner & Riessman(1977/1985)は、ヘルパー・セラピー原則を「援助をする人がもっとも援助を受ける」とし、そのメカニズムを説明した。Slade(2013/2017)はリカバリーには、「病気からのリカバリー」「人としてのリカバリー」の2つの意味があるとし、自分なりに経験を理解し名前をつける(frame, framing)ことがリカバリーに役立つと述べた。自己病名をつけ対処法を考える「当事者研究」のように、ナラティブを公開(U:アンカバリー)し、対処法を発見(D:ディスカバリー)することと回復(R:リカバリー)は関連が深く、加えて仲間(P:ピア)の存在が重要であると考え、これを研究者らは図1のようにリカバリーにおける「UDR Peer サイクル」(小平・いとう,2018)と命名した。

2. 研究の目的

統合失調症当事者(経験専門家)が自己開示し公開したナラティブを、当事者視点から多様なリカバリーに着目し、テキストマイニングと質的分析による混合研究法で明らかにする。そうすることで、ナラティブを公開する場に居合わせる研究者(2名の研究者の専門分野は看護学と心理学)の感受性と当事者視点の両方を生かし合う形で、当事者視点のアンカバリー・ディスカバリー・リカバリーを可視化し捉えることができる。当事者視点でのピアサポートの充実のために、本研究結果が統合失調症当事者(経験専門家)による活動の重要性の根拠を示す可能性につながる。そして当事者一人一人の生き方や生活に着目した多様なリカバリーの姿を浮き彫りにし、精神看護学教育にとっては教育的活用が可能となり、豊かなナラティブ教材(小平・いとう,2009)が得られる。

3. 研究の方法

研究者らのこれまでの成果に基づき、(1)当事者本人が執筆したもの(2)支援者やピアサポーターが執筆したものをテキストマイニング分析する。テキストマイニングの特徴を活かして量的・質的な可視化を試みる。テキストマイニングの量的分析および原文参照機能によりエビデンスに基づく質的分析を行う。加えて、回復の語りを公開している当事者活動で資料収集を行う。このようにして得られた結果を統合することで図式化(モデル化)を試みる。

このような方法により、当事者視点からナラティブを公開(アンカバリー)し、対処法を発見(ディスカバリー)することで回復(リカバリー)している人の特徴と、当事者が同じ病いをもつ他者(仲間:ピア)のリカバリーに貢献することの意義を明らかにすることが可能になると考える。

本研究の倫理的配慮として、分析の対象としたものが、一般に出版・公開されている出版物や当事者活動である。著者の表現や言葉などを改変せず、出版物の場合は、著作権に配慮し引用部分を明示し、出典を明記した。

4. 研究成果

(1) 当事者により表現されるナラティブの分析

23人の統合失調症当事者によるナラティブの分析

2016年出版の『わたしと統合失調症:26人の当事者が語る発症のトリガー』(中央法規)は、リカバリーを生きる人々の体験談を佐竹直子(精神科医)が編集・解説した貴重な文献である。この出版物からリカバリーを生きる人々の語りの特徴を明らかにする。この体験談のうちマンガ・インタビュー・詩を除く23人のナラティブの内容を分析対象とした。本書はトリガー(発病の引き金)として<過労><環境の変化><いじめ><家族関係><性格・気質>の5つを挙げ章立てされている。テキストマイニングにより、5つのトリガーごとに特徴的に出現した単語は、<過労>では「病院」「思う」「仕事」、<環境の変化>では「大学」「友人」「聞こえる」、<いじめ>では「自分」「思う」「人生」、<家族関係>では「母」「薬」「カウンセリング」、<性格・気質>では「トリガー」「リカバリー」「病」などであった。「リカバリー」という単語の使われ

方を原文参照すると、「既存の支援者にはない、ピアサポート独自の有効性を数々実感してきました。それは、支援・非支援の図式ではない、同じ仲間同士のフラットな共感・寄り添いの生み出すパワーであり、リカバリー実証モデルとしての有用性です」(柳尚孝)「さまざまな経験が私のリカバリーの一步となる。私のリカバリーの旅路はこれからも続いていく」(原田幾世)「僕のリカバリーストーリーはこれからも続きます」(北村和孝)「私もまだまだリカバリーの途上にいます」(戸辺博之)などの記述であった。本書はトリガーに焦点を当てつつ、ピアサポートの重要性に言及しており、23人のナラティブからもその点が大きな特徴であると見出した。そのようなナラティブの特徴からピアサポートはリカバリーを支える要素として大切だと考えられる。

23人の当事者の中には、当事者研究で知られる浦河べてるの家の2人の当事者(伊藤知之、山根耕平)が執筆しており、病気の体験や苦労とともに、当事者研究の成果として発見した対処方法を公開し、仲間と共有し、リカバリーしていくことへの意味が当事者視点で記述されていた。このような語り方こそ特徴であり、公開(アンカバリー)と発見(ディスクバリー)を仲間(ピア)と共有し、回復(リカバリー)していく姿(UDR Peer サイクル:図1)であると捉えた。

ビジュアル・ナラティブの視点から：研究者らの参加的観察による資料の収集

研究者らは、2008年から10年以上に渡り、浦河町で開催の「べてるまつり」(当事者研究や幻覚妄想大会が行われる)に参加してきた。当事者研究全国交流集会などでも語りを聞き、資料を収集し、公開された語りの量的・質的な分析に取り組んできた。当事者研究など浦河べてるの家の語りの実践には、やまだ(2018)のビジュアル・ナラティブと共通性があると考えられる。ビジュアル・ナラティブとは、やまだ(2018)によれば「視覚イメージによって語ることや視覚イメージとことばによって語ること」であり、三項関係すなわち他者と共に見る関係をつくって語りあうことにより多様な視点を得ることである。浦河べてるの家および当事者研究にみられる多様なビジュアル・ナラティブについて、公開されているもののみならず研究者らの参加的観察による体験に基づき、その特徴に注目して整理・分類を行った。この取り組みは、浦河べてるの家の創設と当事者研究の発展に関わり続けている向谷地生良氏との論文化が実現した。本論文は、研究者らの10年以上に渡る参加的観察に基づき、対面集合が可能だったからこそ実現できた当事者研究の実践からの丹念な記述による資料の収集である。コロナの感染が拡大してしまった今、感染が完全に収束し克服されない限り、実現できない報告であり、非常に貴重な研究成果である。論文の中で研究者と当事者による研究の共同創造(co-production)の可能性にも言及できた点は意義深いと考える。

(2) 支援者やピアサポーターによる記録の分析

支援者による記録の分析

1996年出版の博進堂文庫20『べてるの家』に学ぶ 鼎談 向谷地生良 川村敏明 清水義晴(博進堂)は、浦河べてるの家が誕生した当時から関わった向谷地(ソーシャルワーカー)、川村(精神科医師)、清水(べてるの家の映画制作)の鼎談で、浦河べてるの家の原点を知ることができる貴重な資料である。立場の異なる3人の語りは、多声性でナラティブ・アプローチに通じ、3人の視点を通して、浦河べてるの家誕生について学ぶことができる。本研究では、向谷地・川村・清水の鼎談から、浦河べてるの家誕生の実践と思想について考察することである。

テキストマイニングにより、使用頻度の高い上位16単語は、「べてるの家」「思う」「人」「いう」「いる」「見る」「出る」「ある」「問題」「出会う」「良い」「わけ」「意味」「人たち」「病気」「生きる」であった。特徴語分析の結果より、3人に特徴的に出現している単語は以下の通りであった。向谷地生良では、「仕事」「昆布」「家」「形」「一人」「浦河」「おむつ」「スタート」「リハビリテーション」「結果」「住居」「発作」などであった。川村敏明では、「出会う」「医者」「意味」「向谷地君」「治療」「わけ」「テーマ」「精神病」「役割」「病院」「大切」などであった。清水義晴では、「べてるの家」「向谷地さん」「映画」「主旋律」「言葉」「人」「川村先生」「相手」「問題」「二十分」「成功観」などであった。

本書の最終章である「鼎談を終えて」において、川村敏明と清水義晴により「主旋律」をめぐる対話が行われており、清水義晴の特徴語分析では「主旋律」が出現することから、特に重要な話題、キーワードと考えて原文参照を行った。それにより、浦河べてるの家の原点に関わる考え方を明確にできる可能性がある。

川村敏明：「あの人はいないほうがいい、あいつに出ていってもらおう」という全体一致の声になりそうになったとき、必ず『べてるの家』らしい、まさに主旋律の言葉として「彼は、やはり迎え入れるべき人なんじゃないだろうか、排除ということだけで問題は収まるだろうか」と誰かが言い出すわけです。…悩みや問題を排除しようとするのではなく、悩みを抱え込んで悩み続けようということ自体が彼らの最も本質的な生き方で、悩みを排除するのは自己否定につながっていくという、非常に本質的なことを彼らはよく知っているんです。一見それが消えかけたとき、必ず誰かがこの『べてるの家』の主旋律を口ずさみはじめる。

清水義晴：その「主旋律」という言葉がとても響くんです。外側からただで見ていたのではわからないけれども、『べてるの家』の中にはその主旋律があって、それが色々な活動の基調になっている。…『べてるの家』には、その「主旋律」を持っているさまざまな人たちがいますね。草創期からの佐々木さんや早坂さん。あの人たちの人間的な味わいには、すごいものがあります

ね。俳優なんかでも絶対あの味わいは出せない、という何か深い、受け入れてしまった人たちの豊かさがある。

本研究では、ソーシャルワーカー、精神科医、映画制作者とそれぞれの立場からの発言の特徴が抽出され、「主旋律」という単語においては、浦河べてるの家の特徴である人間の弱さに対する共感の重要性が見いだされた。それらに一貫するのは、悩みや問題を排除しようとするのではなく、悩みを抱え込んで悩み続けようとする場所の尊重であり、リカバリーを支える上で、「弱さ」のもつ創造性を公開し、発見したことを共有することで、みんなで生きていく開かれた関係がつけられる可能性があると考えた。

4人のピアサポーターによる記録の分析

さらに取り組んだ研究は、当事者が同じ病いをもつ他者（仲間：ピア）のリカバリーに貢献するという、自ら精神障がいを持ちながら他の当事者を援助するピアスタッフの活動経験とは、どのようなものであるか、彼らの活動についての体験記をテキストマイニング分析することにより、精神障がいのある当事者視点から、その体験の内容を明らかにすることである。2019年出版の大島巖監修「ピアスタッフとして働くヒント：精神障がいのある人が輝いて働くことを応援する本」（星和書店）から、4人（高柳律、稲垣麻里子、柳尚孝、上野康隆）の体験記をテキストマイニング分析した。4人は、精神疾患をかかえて過酷な状況乗り越え、リカバリーしながら、ピアスタッフになることで自身の経験を他の当事者のために役立てたい思いを実現している。

単語頻度分析より、使用頻度の高い上位14単語は、「自分」「思う」「ピアスタッフ」「人」「仕事」「利用者」「考える」「経験」「やる」「専門職」「働く」「ピア」「ピアサポートスタッフ」「ピアサポート活動」であった。この分析を通して考察したのは、自身が病いを抱えながら、これまでそして現在の仲間、さらには「これから出会うかもしれない仲間」とともにリカバリーしていくという生き方であり、ピアスタッフの経験をめぐって自分の思いや考えを記述していることが分かる。特徴語分析より、4人に特徴的に出現している単語は、高柳律は「ピアスタッフ」「自分」「思う」「専門職」「デイケア」など、稲垣麻里子は「薬」「友達」「障害」「医師」「大学」など、柳尚孝は「ピアサポートスタッフ」「ピアサポート活動」「人」「不安」「リカバリープロセス」など、上野康隆では「心」「相手」「感覚」「言葉」「休職」などであった。

分析対象の書名に注目して、「ピアスタッフ」「ピアサポートスタッフ」を含む原文の例は、高柳律「ミニ精神保健福祉士やブチ看護師になることは違うピアスタッフならではの専門性、提供できる価値があるはずだ」、柳尚孝「ピアサポートスタッフは決して終わることのない一生続いていくリカバリープロセスを利用者と同じような立場で共に歩いていく人だといえる」、上野康隆「ピアスタッフという生き方は素晴らしいと実感しています。どの人にも大切にしている生き方があります。相手の生き方を尊重しつつ、自分の生き方も大事にする。そのような姿勢がピアということなのかもしれません」であった。

この分析を通して、精神疾患を抱える苦勞、活動中の人間関係の苦勞を通して、自身がリカバリーしながらピアスタッフの活動経験を語っていることに特徴があると捉えた。自分のリカバリーと支援する相手のリカバリーを切り離さず、延長線上に置き、相手と共に歩いていくピアスタッフの活動経験である。経験を自己開示し、仲間と、そして、大変重要な視点は「これから出会うかもしれない仲間」と共有したい思いの強さである。それがピアスタッフになる強い動機になっていると考えられ、ピアスタッフの活動が自分の生き方として意味づけられている。そして専門職にはできない貢献が、経験を通してのピアスタッフの専門性や価値、姿勢として言及されている。ヘルパー・セラピー原則（Gartner & Riessman, 1977/1985）の視点からの考察では、病いを抱えながら仲間を助ける苦勞を通して自分自身のリカバリーを生き、実際の活動を通して仲間や社会に貢献している感覚を得ていると考えた。統合失調症当事者でピアサポーターの原が、ピアサポーターの役割の意味を「どのようなサポートがあるのか、それがどんな役に立つのかなど当事者の視点で伝えることで、自分に合った支援を受けることにつながる」（原・富澤・古谷，2019）と報告したことにも通じるものであった。

この分析において、「弱さ」のもつ創造性により、みんなで生きていく開かれた関係の在り方としてのヒントや「共同創造（co-production）」の可能性をも示唆していると考察した。また、研究者らは、当事者が語りを公開する動機に「聞き手」や「読み手」の存在を強く意識していることに以前から注目してきた。そこで、これまでの研究成果を踏まえ、図1のUDR Peerサイクルを発展させ、図2のように、「観客（Audience）」の存在を位置づけたUDR Peerサイクルと発展させることを試みた。サイクルの外側に「観客（Audience）」の存在を表現し、リカバリーのサイクル全体を観客が見ているイメージである。

（3）「観客（Audience）」の存在を位置づけたUDR-Peerサイクル

当事者視点に加えて本研究課題で常に重視していたのは、ナラティブを公開する場に居合わせる研究者の感受性であった。3年間の研究期間のうち、2年間はコロナの感染拡大の影響下で、これまで体験したことのない苦勞の連続による研究活動となり、研究者らも自らの当事者性に

向き合わざるを得なくなった。まさに本研究開始時には予期していなかった事象である。

このコロナ禍における研究の苦労について、研究者らは 2021 年の第 18 回当事者研究全国交流集会北海道大会（Zoom）で、「共同研究の苦労の当事者」として発表させていただく機会に恵まれた。当事者研究のアプローチ（「苦労のプロフィール」「自己病名」の記述や、「爆発」「誤作動」の「弱さの情報公開」、「公開の原則」など）を用いて口頭発表者として参加する貴重な経験となった。この研究者らの実体験から、リカバリーのサイクルには「観客（Audience）」の存在が重要であると考えた。このことにより、語りにおいて「観客（Audience）」が存在していることの意義や重要性について実体験し考察する貴重な機会を得ることができた。

（４）共同創造（co-production）の可能性への示唆

研究者らが研究期間を通して常に念頭に置いてきたのは、研究成果の発表先として、当事者とともに集い、成果を共有し、語り合えることが大事にされている場であった。そのような研究者らの研究の取り組みの経験の中から、「弱さ」のもつ創造性により、みんなで生きていく開かれた関係の在り方へのヒントを得ることができた。それは、語りを公開（Uncovery）し、対処法を発見（Discovery）することと回復（Recovery）は関連が深く、仲間（Peer）と出会い、支え合いながらリカバリーのプロセスを楽しみ、このリカバリーのサイクル全体を観客（Audience）として存在している人々と共有しているイメージである。UDR Peer サイクル（図 1）に対して、「観客（Audience）を位置づけた UDR-Peer サイクル」（図 2）として図式化（モデル化）して発展させることは、多様なリカバリーの姿を可視化して人々と共有することに価値を見出し、加えてピアサポート活動の重要性の根拠になる可能性がある。

このようなヒントの中には共同創造（co-production）の可能性への示唆があると言える。今回の研究課題により得られた成果を発展させて、さらに共同創造（co-production）の実践の在り方を探り続けていきたい。

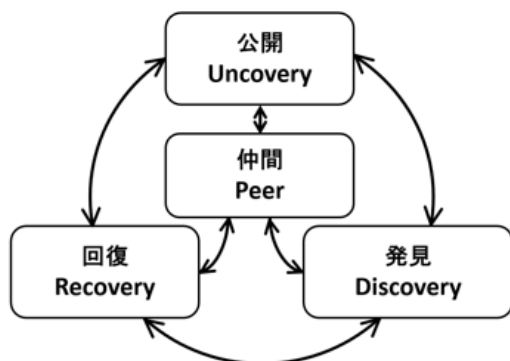


図 1 UDR - Peer サイクル

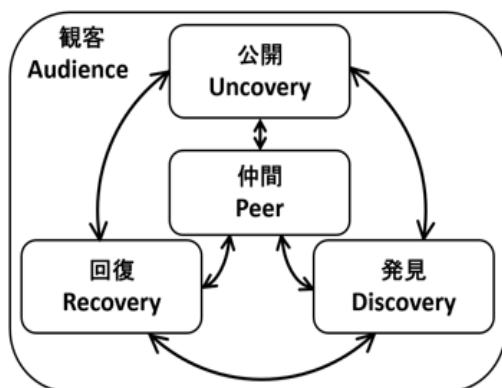


図 2 観客（Audience）の存在を位置づけた UDR-Peer サイクル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小平朋江 いたうたけひこ 向谷地生良	4. 巻 13
2. 論文標題 浦河べてるの家の当事者研究とべてるまつりにおけるビジュアル・ナラティブ：精神障害をもつ人のリカバリーと共同創造（co-production）の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マクロ・カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 35-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 いたうたけひこ 小平朋江	4. 巻 13
2. 論文標題 浦河べてるの家の「主旋律」からコミュニティ援助の在り方を考える：『「べてるの家」に学ぶ』の鼎談のテキストマイニング分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小平朋江 いたうたけひこ	4. 巻 14
2. 論文標題 コミュニティ援助におけるピアスタッフの活動経験：精神障がいのある当事者の視点からのテキストマイニング分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マクロ・カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 『わたしと統合失調症：26人の当事者が語る発症のトリガー』における23人のリカバリーを生きる体験談のテキストマイニング分析
3. 学会等名 第15回日本統合失調症学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 みんなのナラティブ教材
3. 学会等名 第6回こころのバリアフリー研究会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 当事者研究をテキストマイニングする。：共同創造 (co-production) の可能性
3. 学会等名 第16回当事者研究全国交流集会 in 浦河
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 鼎談『「べてるの家」に学ぶ』から学ぶ
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 人々の語りからリカバリーを考える
3. 学会等名 第7回こころのバリアフリー研究会総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 ピアスタッフの語りをテキストマイニング分析あら考える
3. 学会等名 第8回こころのバリアフリー研究会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小平朋江 いたうたけひこ
2. 発表標題 人々の語りから考えるリカバリー！
3. 学会等名 第18回当事者研究全国交流集会北海道大会@Zoom
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

小平朋江 Researchmap https://researchmap.jp/TomoeKodaira/ いたうたけひこ Researchmap https://researchmap.jp/itotakehikowako/ 聖隷クリストファー大学 教員情報 小平朋江 https://gyosekidb.seirei.ac.jp:8083/scuhp/KgApp?resId=S000021 いたうたけひこ研究室 https://www.itotakehiko.com/ 聖隷クリストファー大学 教員情報 小平朋江 https://gyosekidb.seirei.ac.jp:8083/scuhp/KgApp?resId=S000021 いたうたけひこ研究室 https://www.itotakehiko.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 武彦 (ITO Takehiko) (60176344)	和光大学・現代人間学部・名誉教授 (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------